

# ボランティアの自主性・創造性を生かした活動への試みとして ——「友の会ボランティアによるとっておきの美術館ツアー」 取組報告

伊澤朋美

2015、2016(平成27、28)年度、2カ年にわたって担当した事業「友の会ボランティアによるとっておきの美術館ツアー」の様子について報告する。今回この事業を行うに至った契機に、当館にかつて存在した支援組織「アートボランティア」設立当初からの課題と、アートボランティアの友の会への組織統合が少なからず影響している。両支援組織の設立から現状までの経緯や課題についても、併せて振り返り、この機会に整理しておきたいと思う。

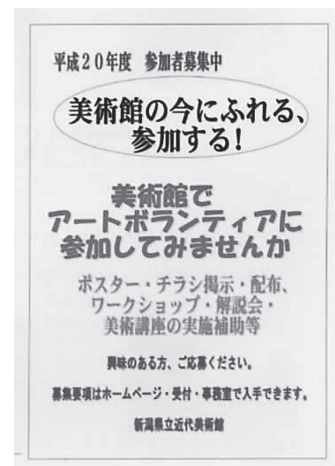
## 1 支援組織設立からの経緯と課題

当館開館の翌年にあたる1994(平成6)年、「新潟県立美術館友の会」(以下、友の会)が発足する。2003(平成15)年に新潟県立万代島美術館の開館にともない、二館共通の友の会組織になった。会則には「友の会は、広く美術を愛する人達を中心として、「新潟県立近代美術館」及び「新潟県立万代島美術館」の活動および運営に協力するとともに、広く芸術に親しみ会員相互の親睦を深めることを目的<sup>1)</sup>」としていることが明記されており、美術館は展覧会やイベントの際など、不定期ではあるが館の活動に協力を得てきた。

2008(平成20)年4月、新潟県立近代美術館運営の支援組織「アートボランティア」が発足する。これまで「友の会」が協力という形で適宜ボランティア活動を行ってきたが、より計画的かつ継続的な活動を行うため、広く一般にメンバーを募集【図1】。この時から「友の会」と「アートボランティア」、二つの美術館支援組織が共存することになった。「来館者の生涯学習の機会と場を提供する」こと、「美術館の活動を共有し、美術館への関心とかかわりを深めることにより、美術館の愛好者を増大する」ことが、アートボランティア設立の目的とされ、主な活動として以下の内容が提示された<sup>2)</sup>。

1. ①ポスター・チラシの掲示・配布
- ②ワークショップの実施補助・企画
- ③講演会などの補助
- ④館内案内・展示品解説
- ⑤その他、美術館が願う活動
2. アート・ボランティアが企画して行う活動
3. ボランティア組織の運営

初年度は、主にキャプションの整理、作品カードの記入など、学芸員が充分に行えていなかった作業が飛躍的に進んだ<sup>3)</sup>。①や②、③等、今後も度々行われるような活動の基盤が作られたことも、成果の一つであった。大部分のボランティアたちの中に充実感はあるものの、一方では当初提示された活動内容のうち、美術館側で十分な機会を創出できなかった内容——とくに④などの内容に惹かれて集まっ



【図1】  
2008(平成20)年度アートボランティア募集時のポスター

- 1 友の会会則第2条  
(平成15年3月19日改訂)
- 2 「アートボランティア開始にむけて」  
『美術館だより 雪椿通信30号』  
新潟県立近代美術館、2008年3月

3 『平成20年度 新潟県立近代美術館  
／万代島美術館 年報』  
新潟県立近代美術館／万代島美術館、  
2009年12月

たメンバーは辞退していった。単発的、下請け的な作業だけではなく、継続的  
活動やボランティアの自発性・創造性を生かす体制を作っていくことが、初年度以  
降検討すべき課題となった。

当初提示された④については、以降も幾度か活動方法が模索された。学芸員か  
らの提案により、2009(平成21)年度には企画展「土田麦僊展」、2010(平成22)年  
度には企画展「牧野虎雄展」、常設展「亀倉雄策展」に関連して、学習会とアート  
ボランティア同士での作品解説会が試みられている【図2】。特に2010(平成22)  
年度の「亀倉雄策展」は、アートボランティアたちが、前年度から亀倉雄策関連資  
料の整理補助を行っており、その成果が反映された展覧会であった。亀倉雄策に  
ついてもっと知りたい、という要望もボランティアたちの中から上がってきており、  
充足感もひとしおだったようだ。将来は、当初からの目的のひとつである来館者  
向けの展示品解説を実施していくことが目標として確認されたが、これ以降活  
動は継続しなかった。



【図2】  
アートボランティア同士による「亀倉雄策展」解  
説会(2010[平成22]年度)

4 原則無償で活動するアートボラン  
ティアであるが、一時ボランティアの  
名札でもっていつでも展覧会が観  
覧できるなどの特典が認められてい  
たことがあった。その後、活動日に限  
り観覧可と、特典の範囲は狭められ  
たが、それでも入会費を払って同様  
の特典を得ている友の会とのバラ  
ンスを欠き、大きな問題となった。このこ  
とが友の会とアートボランティアの統  
合の一因になったとも考えられる。

5 「平成24年度 新潟県立近代美  
術館／万代島美術館 年報」  
新潟県立近代美術館／万代島美  
術館、2014年2月

アートボランティアが活動5年目に入る2012(平成24)年度、友の会の組織改編  
の動きがおこり、アートボランティアは流動的に友の会に統合されることが決定  
した。この頃から、アートボランティア活動への参加者が固定した数名のメンバ  
ーに限られていることが問題視されており<sup>4</sup>、発足当初の目的を捉え直し、より組織  
的・計画的・主体的な活動へと高めることが課題として確認されている<sup>5</sup>。

2013(平成25)年度から、これまで毎年行っていたアートボランティアの新規募  
集・更新が中止される。アートボランティアは、ボランティア活動を続けるのであ  
れば友の会への入会が前提となった。翌年度までが移行期間とされ、よく活動に  
参加するメンバーの一部は友の会へと入会し、幽霊メンバーとなっていたメンバ  
ーはこれを機に辞めていった。

2014(平成26)年度、アートボランティアは友の会に完全統合し、アートボラン  
ティアという組織は無くなった。もともとポスター・チラシの発送作業やイベン  
ト補助など、友の会とアートボランティアがたびたび、活動を共にすることがあり、  
両組織の活動領域が重なることもあった。美術館の活動を支援するという点では、  
両組織は同じ方向を向いており、大きな混乱もなく統合が完了した。ボランティ  
アの運営は、美術館から友の会へと移行。美術館は“協働”というかたちで、友の  
会とともにボランティア活動を検討していくことになった。ただし、アートボラ  
ンティアのような登録制度が無くなったため、活動メンバーは固定化されておらず、  
呼び掛けに応じて参加する友の会会員が、その都度ボランティアメンバーとなった。  
ボランティアの在り方が大きく変化し、美術館側がどのような協働体制を築いて  
いくか、現在も模索が続いている。

## 2 「友の会ボランティアによる とっておきの美術館ツアー」

### 事業の目的

アートボランティア設立当初から、美術館側の課題となってきた、ボランティ  
アの自発性・創造性を生かす場の創出のための試みとして実施したのが、「友の会

ボランティアによる「おきの美術館ツアー」である(すでに述べたように現在のボランティアには登録制度が設けられていないため、「友の会ボランティア」という呼称を便宜上用いる)。アートボランティアは友の会に統合したが、あえてその美術館“通”である友の会会員という立場を生かし、美術館の見どころや楽しみ方をツアーガイドとして紹介することができるのではないかと考え、企画した。彼ら自身がツアー内容を考案することで、ボランティア同士の交流にもなるのではという期待も込めた。

ツアー実施場所は、展示室を除くエントランス付近、屋上庭園、野外彫刻などのフリースペース内。この中で、各メンバーが普段美術館を利用する中で気に入っているもの(例えばレストランのメニュー、景色など)を紹介してもらう。展示品解説としなかった理由としては、作品に対する正しい知識と、ある程度の解説スキルを身につけさせるための研修体制を考案しきれなかった力不足もあるが、何よりもボランティアたちが自分のことばで美術館の魅力ある一面を紹介し、来館者と美術館をむすぶ役割を果たすことを試みたかったためである。

#### 第1期 2015(平成27)年度 実施内容

2015(平成27)年5月に行われる本番に向けて、2014(平成26)年度から4回にわたる勉強会を設けた。第1回は、筆者が行う一般対象のプログラム「はっけん!びじゅつかんツアー」(6月22日)に参加することからスタートさせた。まずはいち参加者としてツアーを体験し、本番の雰囲気をつかんでもらうためである。実施後、以降の勉強会やツアーの概要について説明し、今後ツアーガイドとして参加するかどうか希望を募った。12名が以降の勉強会への参加を希望した。

9月に行われた第2回の勉強会では、彼らが実際にツアーを行うフリースペースをあらためて見てまわり、ボランティアたちは自分が紹介したいと思う場所を確認した。その後紹介内容をボランティア同士で発表し合い、内容を共有した。約2ヶ月後に行った3回目の勉強会では各ボランティアが該当場所で、自分が紹介したいお気に入りの5分以内で紹介。実施後、お互いに「よかった点」「工夫するとさらに良くなる点」などを助言し合った。

この頃にはメンバーは6名に半減。年度開けの4月に行った勉強会は、本番さながらの模擬ツアーを行った。A・B2グループに分かれ、実際のツアーの内容やルートをグループ内で構成してもらった【図3】。グループごとにツアーガイド役、参加者役で入れ替わり実施。その様子は終始ビデオ撮影し、実施後、ボランティアたちは客観的に自分自身を振り返った。

本番は、模擬ツアーのグループを踏襲し、グループA(ガイド3名)が5月9日(土)14:00~15:00、グループB(ガイド3名)が5月10日(日)11:00~12:00に行った。あるボランティアは、コレクション展示室回廊内に設置されている佐藤忠良《女》をよく目にして気に入っており、実はエントランス近辺の窓や屋上からも見えることなどを紹介。参加者たちも代わる代わる覗き込み、感嘆の声を漏らしていた。またあるボランティアは、過去の企画展後にエントランス前に設置されたフェル



【図3】  
ツアーの内容やルートを相談するボランティアたち

ナンド・ボテロ《母子》を、当時自身がその展覧会を見た経験をもとに紹介。当時開催されたボテロ展では、エントランス前から続く並木の間にボテロの巨大な作品が並んでおり圧巻だったことなど、その感動を当時の写真とともに紹介した。また、各々が紹介する場所だけでなく、当館と周辺施設を結ぶ空中回廊スカイウエーや、なかなか知られていない屋上庭園から信濃川沿いの土手方面へと続く通路なども、通りながら紹介された【図4】。各日の参加者が4名と少なかったことが悔やまれたが、参加者の反応は良かった。ツアー終了後、ボランティアたちと初めてお客さんの前でツアーを実施した感想について話しあったが、その場で「練習を重ねたので今後も続けたい」という声が上がリ、もう一度希望者によりツアーに挑戦することになった。



【図4】  
屋上庭園を紹介するグループ

### 第2期 2016(平成28)年度 実施内容

第2期の実施ということになり、まず友の会内に新メンバーの募集を行った。前回の参加者が少なかったため、あらためて第1期メンバーによるツアーを実施し、参加してもらうことを企画した。だが、新規に集まったのは2名、この2名は各々の都合で途中辞退し、最終的に残ったのは第1期メンバーのうち4名であった。

第2期の本番は、10月23日11:00～12:00に実施することにした。すでに勉強会を経験しているメンバーであったため、9月に補足的な勉強会を行い、あらためてツアーを構成してもらった。前回参加者が少なかった反省から、当日の参加者を多く集めるため、館内掲示を重点的に設置。また、ある程度事業が周知されてきたのか、当日は小雨がばらつくあいにくの天候であったにもかかわらず16名もの参加者が集まった。

第1期のグループとは異なるメンバーでツアーを構成したため、各人は前回と異なる内容を紹介することになった。前回別の野外彫刻を紹介したメンバーは、中岡慎太郎《FANTASY》を紹介。野外に設置された彫刻であるという特徴を生かし、実際に作品を参加者にさわらせて石の質感を確かめてみたり、さまざまな角度から見てみたり、作品の重さや大きさに関するクイズを出したりと、体験型のガイドに参加者たちが湧いた一幕もあった【図5】。人前で話すことへの抵抗も薄れ、前回よりボランティアたちの立ち振る舞いが上達してきている様子が見られた。

ツアー実施後には4人と感想を話し合ったが、やはり多くの参加者の前でツアーを行えたことが良かった、という感想が聞かれた。反対に、参加者が多いと、誘導が難しかった、もっと声を大きくすれば良かったなど、反省点も挙げられ、次への意欲も感じられた。



【図5】  
中岡慎太郎の《FANTASY》をさわりながら鑑賞する参加者たち

### 3 成果と今後への課題

第1期、2期の参加者アンケートには「今まで館内の展示しか見たことがなく、参加してよかった」「美術館の新たな見方を知ることができた」といった感想が見られた。また、ボランティアの人柄に親しみ・あたたかみを感じたという感想もいくつか見られた。試みはおおむね達成できたと感じている。



一方、いくつかの問題点も明らかになった。2期にわたりツアーを行った結果、各ボランティアの紹介できる内容は広がったが、“自らが紹介したいもの・気に入っているもの”という紹介内容の起点となるものが、もはや当てはまらなくなっており、事業内容自体を再考する必要があるが出てきた。また、特定の1日のイベントとして設定しているため、参加者が集まらない、またボランティアの都合がつかない場合、イベントが成立しない危うさがあることも問題となった。また、今後このような事業を継続的・長期的に実施していく場合、専任のボランティア担当職員がいない中、しっかりした体制を築いていかないと、短期的試みのみに終わってしまうということ、反省も含め、あらためて実感された。

ときに美術館のヘビーユーザーとして館を訪れ、ときに美術館の有力なサポーターとして活躍する「友の会ボランティア」。彼らの能力を生かしながら“協働”していくことは、美術館、友の会、また来館者にとっても、良い相互作用を生み出すことが今回事業を担当して確認できた。今後も彼らが生き生きと活躍できる場の創出を、模索していきたい。

(新潟県立近代美術館 主任学芸員)